

桜蔭俳話会 通信句会(第七回 平成二十四年秋)

高得点句 自句自解

十五点

④名月につながる坂をのぼりけり

小川名梅乃

愛知県の香嵐溪の紅葉を一泊のバスツアーで行きました。紅葉四千本は十年振りの素晴らしさで、この世のものとは思えぬ程の見事さでした。宿に向かうときには、辺りはすでに夜の帳ばりにつつまれていました。バスが急坂を登る時、フロントガラスに、月が見え、あたかも自分が坂を登っているような思いで眺めていました。

十一点

かはらけの吸ひ込まれゆく谷紅葉

藤本 友子

十一月初め、大山阿夫利神社を訪れた時の句です。大山寺境内から、前の谷に向かつてのかわらけ投げは、的の綱の輪をくぐり抜けることはできず、薄紅葉の谷に吸い込まれていったのでした。今年の災いを全て払ってくれるかの様な感じがしました。

十点

③長き夜や目の前にある探しもの

瀬戸 溪水

近頃、物忘れがひどくなって来た。「おい、此の辺に置いといたシャープペンシル知らないか?」「目の前にあるじゃないですか」。さっき見たときは無かったのに。このような事は日常茶飯事の「ごとく行われている。多少オーバーながら友人たちと話してみると、「俺も、俺も、」と言う言葉が返って来る。年のせいかと思うのは、加齢につれて多くなって来るからである。俳話会通知を見たのは、丁度そのときであり、探しものなる単語がすらすらと出たのが満足出来る句となった次第である。

②上弦の月天窓に治まれり

桜井 幸枝

一瞬の眺めが時間の経過とともに美化されるものらしい。帰宅が遅れ、流し台にそのまま向かっていた。居間の明かりをつけようと居間に入ろうとした時、ガラス戸は狭い庭に大きくなった「つつじ」で真暗。天窓だけがうす明るい。そこに薄赤く淡い三日月が小さい窓枠の中に浮かんでいた。思はずその場に足を留めた角度が違えば見えない。しかし、じっと眺めている時間はなかった。時の経つ程に一幅の絵となって鮮明に脳裏にのこり、後になっての作句である今となっては、あの時の状況が夢の様な印象だ。(選がいただけたのも夢のようです)

九点

③指に巻く切符一枚秋をゆく、

小川名梅乃

大正時代の佇まいを復元した東京駅。駅舎を見に行きました。見事なまでに元の形態にもどっていました。東海道線に乗車しましたが、いつの間にか切符を指に巻いていました。建造物に感動しながら、秋晴れの一日を過ごしました。

②あるだけの息吐ききりぬ天高し

藤崎安紀子

今、九十二歳の母の介護をしています。けっこうストレスがたまりません。それで、家の近くにできたフィットネスクラブへ時間をみつけては通い、ヨガや水中歩行などを楽しみ息抜きをしています。運動は全て腹式呼吸をしながら行うのですが、新鮮な空気を吸い込んだら、体の中から汚れたものをお腹がぺったんこになるまで吐ききる。その時の爽快感は、何とも言えず、ストレスも吹っ飛んでいく気分です。

神の手のなせる点描紅葉山

増田 守

晩秋に会津を訪れた際に得た句である。国内外の民衆の相変わらぬ惨状を見聞きするとき、人間界を善き方向に導き、あるべき状態から外ればそれを厳しく律するような神仏の存在は、易々と信じることができない。積極的無神論であるかはさて置き、作者は少なくとも消極的無神論である。しかし、現地で目にし、我が身を包み込んだ光景は非常に素晴らしく、理屈なしに、「神の手のなせる点描」というフレーズが天啓のように降りて来た。人間界はともかくとして、自然界を統べる神は確かに存在すると実感した。人間界の様々な軋轢から疲れた心身を癒すには、外に出る機会を出来るだけ作って、神々の描く素晴らしい自然の造形に触れることが必要なのであろう。

七点

②秋日和墨の乾きの速きこと

辻 幸子

提出日のせまっている書道の課題を必死に書いていました。なかなかうまく書けず、何枚も何枚も書いて、ふと外に目をやると素晴らしい秋空が広がっていました。澄んだ空気を胸いっぱい吸って、又、書きました。その時に詠んだものです。書も句もむずかしいものです。

①芋煮会渾名で語る同級生

稲葉 幸

久しぶりの同級会でした。私の中学生時は、戦後間もない昭和二十八年です。伊勢佐木

町の街は、進駐軍のG I帽の兵隊が肩で風を切って歩いていました。この繁華街が通学路でした。ある日、転校生があり、自己紹介「私は千葉県佐貫郡から来ました」。ところが私たちは「たぬき郡」と聞き、「えッ」と。以来「ポンちゃん」。例をあげれば「アンドレ」「九ちゃん」「カルトン」などなど。私は遅刻が多く、「待つちゃん」と呼ばれていました。